

近江絹絲人権争議、深夜の組合結成

—長浜工場・新組合支部長の回想—

島根県・元UIゼンセン京都府支部長・金田直樹

はじめに

労働運動の歴史は、代々語り継がれなければならないと考えています。文字として記録に残っても、時の経過と共に、文字は記憶の彼方へ奥深く沈み込んで行き、特定の人を除いて、手にして読み続けられることがなくなるからです。

多くの先輩が作ってこられた尊い闘いの歴史は、記録として書棚にしまい込まれては、「輝きと教え」は眠りについてしまい、労働界の貴重な財産が失なわれます。幾多の争議の歴史と論争を風化させてはなりません。私はこのように考えて、今頃になってからでは遅いのかもしませんが、定年後、労働運動史の勉強をしています。

その中で気になることが出てきました。今回はこれを知りたくてこの取材をしました。それと言うのは、戦後の労働運動史に残る近江絹絲「人権争議」の「ある工場」のことでした。というのは「長浜工場」です。

人権争議のことは、全織同盟史を何回も読み、また滝田実さん（全織同盟第3代会長）や宇佐美忠信さん（第4代会長）の著書も読みました。そこで気にかかったというのは、本社、工場、営業所など9事業所がある中で、長浜工場の新組合結成が、東京営業所と共に最後であり、それも本社組合が結成されて約1カ月も遅れていることでした。何故なのだろうか、疑問がわきました。

「疑問がわいた」と言いましても、歴史的な事実をさぐるなどというような、大げさなことではなく、当時、長浜工場にいた人との人間関係で関心を持ったのです。と言うのは、私が30数年前から労働運動で学ばせてもらっていた中村幸男さんが、その頃、近江絹絲長浜工場で旧組合の副組合長を努め、新組合ができてからは、結成と同時に初代の支部長として活動しておられた所だったからです。「是非聞こう」すぐ行動を起こしました。「あの頃のもようを聞かしてもらえませんか」早速、中村さんに便りを書きました。すぐ快諾の返事です。平成15年2月28日、中学校の同級会に出席する道すがら、大阪で途中下車をし大阪友愛連絡会の書記局で何年ぶりかに会いました。中村さんには、関西弁で、たくさん資料を前に話をしてもらいました。時の過ぎるにつれ熱がこもり、時間を1時間しか取れなかったのが残念でしたが、歴史「人権争議」の生々しい現場をかいま見た思いで、貴重なページを開くことができました。感謝です。この話しを完全に復元することは私の実力ではできませんが、整理をし、歴史を語る大切な資料とさせてもらうことにしました。それがこれからの物語です。

金田：長浜工場は、新組合の結成が6月28日です。本社で結成されたのが5月25日（昭和29年）で、それから一カ月遅れているんですが、この理由は特にあったのでしょうか。

中村：一つは、ちょうど新工場の建設中やったんよ。働いている者、土地の人はもち論のこと、市の関係者もこの工場の完成を待っていたんです。ここで争議をやるということになるとう建設はストップしてまうんと違うか、と言う心配はみんな持ってました。長浜工場というのは、従業員の大半が長浜市とその周辺出身者であるうえ地元通勤者が多いんです。地元としたら「わが会社であり、わが工場」ですがな。縁故関係で入った者もありますしね。組合を結成すれば工場閉鎖という会社側の一方的宣伝もありました。それに「争議」ちゅうようなもんは、今までに出あった事のないもんですしね。どちらかという、工場全体に家族的雰囲気強い方でした。と言うて、不満が無かったわけではないですよ。後で話しますが。

それに旧組合の存在もねえ。私はそこの副組合長でした。会社の立場も職制で、織布と仕上科の運転主任でした。身分は社員です。その頃会社には、社員、工員の身分制度があつてねえ。社員は、まあ言えば会社側です。この身分制度は人権争議のあと廃止になりましたが大きな変化やったねえ。給料も月給制に統一したし、作業服も同じ物にしました。

ほんで私の立場やけども、職制であり副組合長ですがな。職制の言うことは聞かなあかん、と言う空気になつた。高校出たというだけで主任になつとるんやから、私みたいなもんでも。

職制が動かないと、なかなか新組合を作るという事にはならんという状況はあつたと思う。

そんな状況の中で、どないして新組合を作ったかという事ですけどね。それは6月27日の昼前です。日曜日やったけども会社から呼び出しがありましたんや。会社は全職制を集めて対策委員会ですわ。「新組合を作らすな。絶対にストに入るな」との工場長のしめつけやった。それを終わって下宿に帰ったら、今度は全織同盟や本社の人に来て「中村君、神社に来てくれ。顔を貸してくれるか」ちゅうことすな「今夜起ちあがれ」とそこでいろいろハッパをかけられました。

それから工場に行って、それぞれの職場にいる組長に「内緒やけど、今夜、仕事が終わった頃に「中村が来たぞ」言うたらみんな連れて出てきてえな。たのむで」言うてね。そしたらね、秘密裏にサーッと行き渡ったんですよ。

28日の午前1時前。なに食わぬ顔して工場に入り、女子寄宿舎の前で声をかけたら、みんなワァーッと出てきました。会社の表門は、会社が工場建設を請け負っていた人夫を雇って「全織や彦根の組合が来たら追い返せ」ちゅうんで固めとつたから。ここで怪我したらあかんと思うて、裏の塀を乗り越えて脱出させました。もうみんな手ぬぐいで鉢巻きをして、なんにも書いて無い鉢巻きやけど。えらい早よう出て来よつたなあ、と思つたら、みんなズック履いて布団に入いっとつたらしいわ。舎監に見つかったら止められるから。工場裏の田んぼの暗やみの中でいったん集合し、それから正門に入って事務所前広場で新組合の結成大会を開いたんよ。

<参考>この時のようすを、6月29日の産経新聞は次のように報じている。「近江絹糸の7工場中ただ一つ“弧壘”を守って平静を続けていた長浜工場も、27日夜、全織彦根工場新組合員の呼びかけに応じて、25名の男子組合員が塀を乗り越えて場外へ脱出したのをきっかけに、女子工員約100名もこれに続いて脱出したことから大混乱となり、逆に工場正門を外か

ら突破、内側にいた約100名の女子工員を交えて深夜の大会となり、約400名により新組合を結成するにいたった。・・・後略」

全織同盟としても、長浜は小さい工場やから、他の工場にドンドン組合ができれば、自然発生的にできるやろう、と、後回しになったと言うことやろくなあ。他の工場では事件が起きてたし、手が回らなんだと思うわ。

いろいろ言いましたけど、こんなんが遅れた理由やと思っていますんや。

金田：争議前の工場のようなすとか、争議が始まった頃の雰囲気はどんなだったですか。

中村：一つの事例を話すとね、会社では「月例の首切り」というのがありましたんや。（別記人権争議22項目要求参照）その白羽の矢が、私の下で働らいた戦争未亡人に当たったんです。その人は年齢のせいで、やや給料が高いんで、会社はその人を辞めさせて若い娘（こ）を雇おうと考えたんですわ。首を切られると、家族をかかえて路頭に迷うことは目に見えてましたから、彼女はベテランで特殊技能を持ってるし、家族の生活もあるからクビにしないではしいと、一週間ぐらい工場長と掛け合いました。私は20歳。元気でしたなあ。一週間ぐらいしたら「ほんなら、その人を首にするのはやめるから、代わりにお前に辞めてもらおう」ちゅうことです。私は退社してもよいけど、自分がいなくなったらまた他の人の首切りが行われる。それは阻止せないかと頑張りました。争議前やから思いきった行動でした。そうしたら、幸いなことに、争議前に工場長が転勤になりよって、私の首もつながったんです。ここにね、長浜支部の機関誌「愛労」がありますよってこれを読んでみてください。みんないろいろ書いてくれています。私が説明するよりええと思います。

<参考>機関誌「愛労」を読み、その中から、伏木翠さんと川島艶子さんの文章を一部掲載させてもらうことにした。

争議一カ月を顧みて 伏木 翠

暑さ厳しくなりました今日、私たちは一人の脱落者もなく、意気ようようと戦ってまいりました。振り返ってみますれば、あの忘れる事の出来ない6月28日深夜の静けさを破って、新しい希望に胸躍らせて立ち上がって早一カ月の闘争を終えようとしております。闘争初日はなんとなく不安な日々で、工場長、担任者、寮の先生方と顔を合わすのも恐ろしいような気がいたしましたが、今は争議目的や、全織問題の内容もはっきりわかり、会社側がどんな切り崩しを行なっても、私達はびくともしない団結を固めました。大阪本店をはじめ四工場は早くから立ちあがっておるのに、私達長浜工場はなぜこんなに立ち上がりが遅かったのでしょうか。

全織同盟、彦根の同志が呼びかけに来て下さると、工場長はじめ社員は顔色をかえて寮に飛び込み、私達を部屋に閉じ込め、声が聞こえないようにレコードをジャンジャン鳴らしました。そしてセスナ機でまかれたビラは全部とり上げてしまいました。ポケットにこっそり隠しておくと寮長さんが睨みをきかして引き取ってしまったのです。新聞もろくに読む事が出来ないしニュースもかけてくれないので、他工場の様子なんか全然聞くことが出来なかったため、全織

同盟とはどんな組合なのか、なぜストライキに入らなければならなかったか等、私達にはわかりませんでした。

ある日久しぶりに帰宅すると、新聞に近江絹糸争議についてくわしく記事が出ていたのでそれを読んで行くと、今まで工場長や寮母の方々から聞いたことがあまりにも違っているのにただ驚くばかりでした。

私達はこの様に何もかもだまされて、個人の自由や、文化活動、労働意識の向上を虐げられてきたのです。… 後略。

争議を顧みて 川島 艶子

あの感激の日、忘れようとて忘れる事のできない6月28日午前1時・今胸に手をあてて考えてみる時、ああ、あの時はよくもあの様な勇敢な動作ができたものだった。あるものは裏の塀を乗り越え、ある者は寮母の止めるのもおしきり、新組合に加入していったのだった。… 中略・80余日も続いた争議ではあったが、誰一人として団結を崩す者もなく、どんな苦難な事でも同志愛でもって助け合い、励ましあって来られた事は大変うれしい。そして一人一人が組合に対する知識を身につけることができたのです。忘れる事の出来ないデモ行進、御旅所（町の子供歌舞伎の山車が集まる広場）にての真相発表会は、人情ある者ならば涙なしでは聞いていられなかったでしょう。真相発表を聞いてくれたある人は言って下さった。貴女達の闘争はきっと勝つよ。そして女子の方の真相発表を聞いて、私は胸がいっぱいになってきた。本当によくがんばっておられますと。

この言葉は、私の胸に大きなショックを与えてくれました。その日から、尚一層頑張ろうという闘争欲が小さき乙女の胸に燃え始めたのです。

その時、どうしても家に帰らなくてはならぬ用事ができ帰ったのです。いつもだったらゆっくりして帰ったらと言ってくれる家の者も、この時ばかりは、一寸でも早く帰れ、お前一人がこうしていい気で家には360名の同志に対して申し訳ない、と言ってくれるのです。喜んで工場に帰ってきました。

工場に帰ってみれば、第三組合幹部のつるし上げとか、重油問題等で同志達は一生懸命です。

その時の私の気持ちは自分勝手な行動をとった恥ずかしさでいっぱいでした。…後略

金田：人権争議と言われるだけに、記録を読みますと、労務管理がひどいと言うか、22項目の要求を読みますと、失礼ない方かもしれませんが、前近代的という風を感じたのですが。やはりひどかったのでしょうか。

中村：まあ、残念ながら22項目の要求通りやったなあ。みんなが特にしんどい思いをしとったんが、400人も働いとるのに医務局もなかったこと。病院に行くのも遠いし、なんとかしてくれえ言う思いは強かったですなあ。それにいろんな競技ですわ。寮を美しくする競技とか、生産向上の競技とか、ワアーツとやらしとったわけ。それが次々ありまっしゃろ、みんな疲れ

てもうてへとへとですわ。基準法違反なんてヘッチャラ。

それに信書の開封。湯沸かしてね、その湯気を封したところにあてるとね、のりがはがれますんや。それで出して読みよったんです。ほしたらね、男から来た手紙は「これは二人の間がおかしい」と疑いよるわけです。「恋愛なんかされたら、能率が下がる」ちゅう考えでんがな。夜間の学校に行ってもらっても困る。ただ働け働けで…。それで、みんなはなんで近江絹糸に来たのや言うたらね「学校があつて働きながら学べる」と聞いて来とるんです。ところが入ってみると学校なんかありますかいな。嘘を言うよったわけや。そんなこともあつた。映画「起ち上がる女子労働者」が、今はビデオになっているので是非見てほしいね。

金田：争議は106日間という、超長期間でした。この期間みなさんはどのようにして過ごしていたんですか。

中村：執行委員は朝の8時から夜の8時まで工場に詰めてましたなあ。独身者は寮ですわ。この寮でほとんどが生活しよったから組合員の結束がでけたんです。会社はね、ここにめっこを付けて「寮舎は団結のもとやから、みんな家に引き取らせよう」と考えよつてね「こんな所においといたら、男女関係の風紀も乱れるし、ややこしいから引き取ってくれ」いうて、手紙を家にだしよったわけですわ。

さあ、その手紙を見て親は心配して来よりますわな。それでね、ぼくらが、実状報告をして、心配するような事はない言うて説明するとね、帰る時は「がんばってください。うちの娘をよろしく頼みます」と励まされました。中学校の先生も心配やったんやろう、よう激励に来てくれました。こんな風にして、家族や学校の先生なあ、それから町の人、全織同盟のいろんな組合の励ましがあつたから、長期間の争議をもちこたえることができたんですよ。長くなつてくるとどうしても単調になりますから。

労働講座もようやった。みんな意識が高まつたなあ。若い組合員ばかりや、ほとんどが中卒で、難しい理屈なんかそんなに勉強してません。労働基準法や労働組合法や言うたかて、中学校の社会科の時間に通一ぺんの事を勉強しただけですわなあ。もう忘れてもうとるんかていますやん。それがすごいこと勉強しましたわ。乾いた砂に水がしみ込むちゅう感じやつたです。やっぱり、現実に争議をしてる中だけに迫るものがあつたんやろうと思います。機関誌見てもうたらわかつてもらえんと思ひますが、みんなしっかりしたことを書いてくれます。

行動的な面では、ピケのはり方訓練とか、労働歌の練習ねえ、鐘紡の長浜工場の見学にも行きました。それから毎日のように、いろんな組合から激励に来てもらいましたから全員を集めて話を聞いたり、報告集会を開きましたよ。

またこの争議中に、**ボイラーで燃やす重油問題**が起きよつてねえ。組合への切り崩し策ですわ。会社がいらんわけです。しょうがないんで、会社が飼育しよった豚を二頭売つて重油を買つたりね。それももうなりだした。そうしたら会社は、7月17日で給食をストップしよつてねえ。みんな飯が食えんよになつたらどないするんや、ということや。親も心配しますわなあ。飯も食えんのんやつたら、家に帰つてこい、言うよんなもんでんがな。それでしゃあない、組合管理をするわけです。給食班を作つて飯を炊いたり、おかずを作つたりです。それも重油がだんだん少のうなつてくるとどうにもならんよになつてねえ。食事も三度を二度にし、風呂も二日にいっぺんとか三日にいっぺんですよ。ほんで工場と団体交渉ですわ。工場長に「本社に行つて交渉して来てくれ」と言うても、なんやかんや言うて全然らちがあかん。こ

っちは真剣やのにビールを飲んでますんや。事務所の二階でやっと思ったんですが、これではあかん言うんで、工場長をみんなのおる下に降ろして大衆団交をやったんです。悪く言えばつるし上げでんがな。午後の2時から7時頃まで。ところがこれが強要罪になりましてな、全織同盟のオルグが有罪になりましてん。私達の為に申し訳ない事だったと思っています。こんな給食の問題があったから、結構みんなは忙しかったです。

それに、労働講座ばかりでもいかなので、レクリエーションをいれたり、真相発表会をしたりでねえ。メモにその頃の日課を書いていますよって見といてください。

<参考>真相発表会のもようは、前記・川島艶子さんの文章をお読みください。

○ 争議中の日課 ○

6 : 30 ~ 8 : 00 朝食 8 : 00 ~ 8 : 30 体操 8 : 30 ~ 10 : 00 外出・ダンスその他 10 : 00 ~ 11 : 30 大会 11 : 30 ~ 13 : 00 昼食 13 : 00 ~ 14 : 00 外出、ソフトボールその他 14 : 00 ~ 16 : 00 労働講座 16 : 00 ~ 20 : 00 夕食、入浴、自由外出
執行委員の勤務時間 8 : 00 ~ 20 : 00

金田：争議の中では、悩まれたり、苦勞されたことがいろいろあったのでは、と思うのですが、いかがですか。

中村：ぼく自身は、毎日が新しいことばかりやから、悩むことや苦勞なんちゅうのは感じなかったねえ。両親や兄が心配してましたけど。と言うのが、「中村は気が狂うてしもたから、迎えに来てくれ」ちゅうような手紙を、会社が親父に出しよったんですよ。家では早速親族会議を開きよったらしいけども、話すうちに「そらあ、おかしいで。家の幸男がそなんになるはずがないぞ。兄い、お前行って見てこい」ということで、兄貴が来たんです。話を聞いたり、現場の雰囲気を感じながら兄貴もはまってもうてねえ、一週間ぐらい工場にいましたわ。組合員の家族、先生の協力は大きかったねえ。それに、新聞に毎日ニュースで書かれるもんやから同情はよせられました。組合員は、仲間に迷惑をかけたらいかんということで結束してました。だれも家に帰ってぬける人はいなかったから。女性は強かったですよ。

金田：争議中、考えられたこととか、感じられたこと、感動されたこと、学ばれたことは、どのようなことがありましたか。

中村：社会の良識に支えられた争議でしたね。それが一番大きかった。もしこれが新聞なんかで反対に「労働組合もたいがいしたらどうや」なんて書かれてみいな、自分たちもぐらつきまんがな。みなさんに「やれええ、ヤレエエ」と応援してもらえるし、町の人達も新組合を応援せないかん言うてくれるし、買い物に行っても「がんばりや」言うてもらった。ただ一途に自分の真心を尽くす、そうすれば周りの人はほっておかない。ということを感じましたね。

私が、39年間労働運動をさせていただいた心の根っこは、全織同盟の組合員の人達から、一人当たり480円というカンパをしてもらったことです。これは当時の中卒初任給の10%でっせ、並大抵のことではないはなあ。すごいことだと感動しました。それからねえ、忘れられんのは、争議最中の全織同盟新潟大会の事です。滝田実会長の近江絹糸人権争議支援の提案

演説にしびれてしまいました。鳥肌が立ちましたなあ。それを聞いてからの私は変わりました。それまでオロオロしてたのが、報告にしても挨拶にしても口調が変わったそうですわ。えろう自信持ってきよったのう言われたりして。滝田会長の魂が自分に乗り移った、そんな気持ちでした。

それとねえ、若い女子組合員の結束が固かった。歳の若い娘（こ）が、ほとんどですがな、争議を恐れたり、いやになって家に帰ってしまうのではないかと心配しましたが紀憂に終わりましたなあ。みんな帰省してもすぐ戻ってきよるんですわ。家族の人や中学校の先生の激励を受けて、土産なんかもらってね。彼女たちの一途な態度に感動しました。

<参考>このあたりのようすは、前記の川島さんの文章を参照ください。

金田：争議体験から、現役のリーダーに伝えておきたいと思われることはどのようなことがありますか。

中村：争議と言うことだけやのうて、39年間の労働運動の経験から、二、三話すとねえ、一つは、理解しても、納得と共感がそこにないと人は動かんいう事です。組合員は、組合リーダーの解説を聞きに来るんやない。課題に立ち向かうリーダーの意気込み、勢いを組合員は絶えず見つめているということです。解説者やなしに解決者になってほしい、と言うことや。いまどっちか言うと解説がうまいんよ。そこらへんの新聞や本から集めて来て、自分の言葉みたいにしてしゃべつとるけど、そやなしに、自分の足下で起こっているAさんBさんの問題をどない解決するんやちゅうことや。わからん事があつたら現場に行く。現場の事実から学ぶ姿勢が大切。どんな知識も自ら得た体験を越えることは出来ないということです。「組合員起点の労働運動」の大切さも争議で学びましたわ。二つ目は、脱イデオロギーと言われる社会でなにを運動の原点にすえるかや。これは、今は亡き山田精吾さん（元・ゼンセン同盟書記長・連合事務局長）が言われた「弱い者と強い者がいたら、弱い方の立場にたつてしっかりやる」事やと思う。わしはねえ、他人の痛みがわからんリーダーは、なんぼ頭がようても失格やと思うとるんよ。三つ目は「自分でなければならぬ人生とはなにか」を行動することによってあきらかにすることや。今やっている労働運動は、自分の人生でかけがえのない大事なものの、生きていく証しなんだと考えることや。そやないと、心底力も入れへんで。

金田：争議を振り返られて特筆すべきことはどんなことでしょうか。

中村：労働組合の力はすごい、全織同盟の底力って凄いなあ、というのが実感やねえ。結局ね「自分一人でできんことを、みんなの力でやる」と「みんなが良くなる中で自分も良くなる」ちゅうことがすごく大事なことなんや。自分だけようならええんやと言うのやつたら、労働組合はいりませんがな。今ね、年功序列賃金はやめて能力給にする言うと、力があると思うもんや若い者の中には「賛成」と言うことになってますわな。それは違ふと。そんなんは一時的にはええかもしれんけど、自分の人生を考えたら、将来なにがあるかわかれへん、山あり谷ありや。一時のことだけ考えとつたらあかんのとちがうか、と言いたいわ。陰陽一対の選択が大事やと思う。

今の世の中見てみいな、ひどい世の中やで。近江絹糸の人権争議から半世紀たつとるのにや、

リストラという一言で理不尽な解雇、横にらみの人員削減があっちこっちでいやというほど起きてます。単身赴任を長いことさして、もうひどいことやで。単身赴任を8年も10年もやったら病気にもなりよるよ。奥さんかってノイローゼになりますわ。気の毒なんは、過労死や自殺せないかん人や。人間の尊厳がおかされとるのに、このままではどうにもならんですよ。目の前の一人を大切にしてほしいな。

それと今日の問題一つが、不払い残業でんがな。こんなもん人権争議の要求項目や。50年たっても解決してないなんてどういうことやと。ええかげんなことをするな、と言う事ですよ。過激なことを言うつもりはないけども、経営者は「企業の存続と発展がなければ従業員の福祉の向上もない」という名目を錦の御旗にして、労働者を分断してますわな。働く者はこれに乗ったらあかんのや。一生懸命働いても、賃金は下がる、一時金は下がる、あげくのはてに、そこで働いていた従業員はリストラ言うことで解雇され、失業し生活に困っとる。どない考えても働く者にとって勘定にあわん話しやで。〇〇労働組合があつてよかつた。〇〇労働組合でよかつた。この「が」と「で」を組合員が思ってる組合にしたいなあ。

それからね、よう労働運動のビジョンとか、21世紀の労働運動はいかにあるべきか、言うて解説したり演説しますわな。これを将来に目を向ける「視力」言いますねん。これも大事やけども今の課題を絶対に解決して見せるという「志力」が大事でっせ。志がなければ地図があつても迷うだけや。人権争議は「志力」で「死力」をつくしたから勝利したんです。労働組合も「志力」を持つことやと思います。

金田：長浜工場にいた人達で同窓会をよく開いておられるようですが、その時はこの争議の頃の話が出ますか。

中村：あんまり出ないねえ。その後工場が閉鎖になって転勤したり、退職したりしましたから。まあ、人生もいろいろあつて、もっともっと自分で解決せなあかんことが山ほどあつた言うことです。あの頃のことを飾りたててしゃべることはないですなあ。今はどうしているやとか、孫のことや、主人が亡くなってどうやとか、そう言う話が多いねえ。そんな中でこんな話題がありますんや。男性で、最愛の奥さんを亡くした人がいましてん。息子と工務店をやつとたんですが、奥さんを亡くしてから、だんだん虚脱状態というか、無気力になってしもうてね、言えば、ボケたみたいになってしもうたんですわ。そのことを聞いた長浜の昔の仲間が、こらほつとかれへん言うて、それぞれ会社の勤務が終わってから「家を建てる所はないか、増改築する所はないか」言うて走り回つて注文を取つてきよつてね。その人それで立ち直りましたん。ほんでまた初恋の人と再婚もしてね。同窓会も二人で来てます。もう一人は脳梗塞で倒れてから、自分の訓練もあるんやろうなあ、人形作りを始めて、それをこの前の同窓会の時に、全員にプレゼントしてくれました。そんなことで集まると感動することがありますんや。今年の10月に第18回近注絹糸長浜同窓会をやります。今から楽しみです。昔歌つた労働歌をみんなよく覚えてますよ。

まとまらん話ですいません。残念やけど時間やなあ。直さん、これからも機会があつたら話しましょうや。「遇い難くして遇うを得たり」今日はいいい日でした。ほんならこの辺で終わろうか。おおきに。

金田：今日はいろいろよい勉強ができました。近江絹糸の人権争議だけでなく、現役引退後の生き方まで話してもらいました。労働運動史を後輩に語り継いで行く時に、中村さんにお聞きしましたことを参考にさせていただきます。忙しい中を私のために時間を割いてもらいまして有り難うございました。〈取材・2003年2月28日〉

(参考)

人権争議 22 項目要求

1. われわれの近江絹糸労働組合を即時認めよ
2. 会社の手先である御用組合を即時解散せよ
3. 会社が指名せる労働者代表の締結せる一切の規定を撤回せよ
4. 拘束八時間労働の確立
5. タイムレコーダーの即時復活と残業手当の支給、貸金体系の確立
6. 合理的な退職金、旅費、宿直費規定の設定
7. 有給休暇・生理休暇の完全実施
8. 食堂の完備・更衣室の新設・社宅並びに寮設備の改善拡充など、福利厚生施設の充実
9. 宿直室の完備・専門宿直者・専門掃除夫及び各寮の専属炊事係即時配置
10. 仏教の強制絶対反対
11. 夜間通学など、教育の自由を認めよ
12. 結婚の自由を認めよ、別居生活を強制するな
13. ハイキング・音楽・映画サークルなど一切の文化活動を認めよ
14. 労働強化を強制する各種対抗競技を廃止せよ
15. 人権を蹂躪した信書の開封、私物検査を即時停止せよ
16. 密告者報奨制度・尾行等一切のスパイ活動強要を止めよ
17. 外出の自由を認めよ
18. 工場長に強制して行わせる月例首切り反対
19. 各課最低必要人員の即時補充
20. 重役の人格を無視した言動及び始末書乱発の禁止
21. 自動車部員の社内寄宿を廃止し、社外寮に引き移すこと
22. 自動車に対する傷害保険の即時加入

以 上